学校と子どもたちに憲法を

伊藤真さん・児玉委員長憲法対談（ダイジェスト版）

9月6日、伊藤真さん（伊藤塾塾長・弁護士）と都教組児玉委員長が憲法についての対談を行いました。そのダイジェストを掲載します。なお対談の詳細につきましては都教組のホームページに掲載しています。

伊藤真さん

憲法ＤＶＤを教材として作成

（伊藤）私たちがつくった「憲法を観る」のＤＶＤをご覧いただきましてありがとうございます。実は先週、東京弁護士会の「憲法問題対策センター」というところでこのＤＶＤを見ていろんな先生方に感動や意見を聞いたりする機会があったんですね。そこで、けっこう色々な意見が出てきて、中高生に対しての憲法教育の難しさを改めて感じました。そのような意味からも、今回つくらせていただいたＤＶＤは、現場で先生たちにうまく活用していただけるような素材として作らせていただいたものなんですよ。

（児玉）私は社会科の教師なんですが、これを使うとしたらどういった順番に授業を組み立てていくかな、と考えながら見させていただきました。また、扱っているテーマは、中学生が関心を持って十分考えたりすることができる内容になっていると思いました。

（伊藤）そうですね。最初に一つのトピックだけを見せて、それを噛み砕いて、みんなでちょっと話をして、というような形で……。

（児玉）ええ、そうですね。必ずしもＤＶＤの順番にとらわれずに、例えば労働者の権利のところとか、それぞれのテーマが持っているメッセージを通じてどんなことを考えるか、そういった組み立ても教科書に合わせた形で入れ込みながらやっていくことも十分に可能だと思いました。

教職員と法律家の共通点

（伊藤）そのように使っていただけるとうれしいですね。あのＤＶＤ自体も、一つのテーマに色々なことを入れ込みすぎているところがありますよね。それをうまく現場の先生たちが切り分けながら使っていただければと思います。ところで、私はよく先生方の前でお話させていただく機会があるんですけど、私たち法律家の仕事と教師の仕事は似ているところがあると思っているんです。それは、どちらもまず一人一人に向き合わなければいけないということです。それからもう一つは、経済的な効率では測れない価値というものを伝えるというところも、教育者と法律家と似ていると思います。三点目は、本当にその問題を解決しようとしたら、やはり社会や憲法の問題に目を向けざるを得ない。言い換えれば、教室で本当にその子どもを救いたいとか立ち直らせたいとかと考えたならば、その子どもの背景にある家庭の問題にも目を配らなければいけないでしょう。私は、教室というのは社会の縮図だと思うんです。教師の仕事と法律の仕事って似ているなぁとつくづく思うことがあるんですよ。その意味でも先生方にまず憲法を知っていただきたい、これがね、まず第一なんですね。

（児玉）私たち都教組も、１９８２年に「日本国憲法―君たちはどう生きるか―」というスライドをつくりました。当時の時代背景からも、子どもたちを守りながら子どもたちと一緒に憲法の未来を考えていくという思いがありました。だから子どもたちの学習に使えるスライドという形をとりながら教職員が改めて憲法を勉強する、そして父母とも一緒にそのことを考えたい。そういう思いでつくったんです。ところで、法律家の方と教職員は似ているとおっしゃいますが、同感です。しかし現実は、教室で一人一人の子どもたちとつながりあいたいと思っても、今、国や教育行政が学校教育に求めているものとのズレが大きくなっています。一人一人を大事にするということよりも、学校が求めるものに子どもたちを向かわせるということに力を注いでいる傾向があります。本来、教育は人格の完成を目指すものですが、教師の思いがそこいく余裕がないような状態が「教育改革」という名の下につくられつつあります。そして、その中で学校教育が、競争や管理、さらに貧困と格差の問題、家庭の教育力や経済力によって子どもたちの未来が決まっていくような、そういう中で子どもたちが悩んでいる問題、そのことに学校はどうこたえられるか、あるいは教師が子どもたちのその悩みにどうこたえられるか、このようなことがすごく求められていると思うんです。このＤＶＤからは、子どもたち「一人ひとりが大切」、大事にしたいというメッセージが伝わってきます。その思いがとてもすばらしいですね。

児玉委員長

憲法の根本価値は、「どの子も大切」ということ

（伊藤）うかがっていましてね、まさに「一人ひとりが大切」、憲法の世界でいう「個人の尊重」を想起しました。それがこの国の憲法の根本の価値なわけです。言葉を換えれば、「自己肯定」といいますか、この世の中に生まれてこなければよかった子どもは一人もいない、ということが憲法の根本の価値なんです。たとえ問題行動を起こしてしまうような子どもであったとしても、それでもやはり今ここに生きている、それだけでかけがえのない価値があるんだっていうのが憲法の根本の価値なものですから、それを何とかいろいろな形で伝えたいなというのが私の奥にある強い思いなんですね。先生方や、例えば親御さんたちが、子どもたちに「あなたは大切なんだ」って言ってあげることはすごく大切なことだと思うんですけれど、そこにもう一つ、この国で最も大切な法がそれを大切な価値としているんだよ、憲法というものはそれを一番大切なものとしているんだよということを伝えてあげることによって、保護者が言っていることや教師が言うことがさらに強調されるというか、それが本当にこの日本の社会では大切なことなんだなということを、より後押しすることができるんじゃないかと思うんですね。

（児玉）そうですね。

（伊藤）先ほどのお話にあったような、もうゴールが決まっていて、そこに到達できるかだけで評価してしまうというような教育方法は単純でわかりやすいかもしれませんが、まさに子どもたちの多様性や可能性をつぶします。将来どれだけ伸びるかわからない、どこへ行くかわからない子どもたちに、一つだけのゴールを決めて、そこへ引っ張るわけでしょう。そこから外れちゃったら評価しないわけというわけですが、それぞれのゴールはみんな違っていわけですよね。本当に、子どもの数だけその子どもの目指すゴールはあっていいわけであって、それを見つけてあげるのが、いわば、回りにいる大人の責任のはずですよね。それを一つのゴールだけ示して、これに到達できないやつはしょうがない、なんて言ってね、それはないと思うんです。ただ、この問題は、教育基本法改悪のあたりから、その前から続いていますけれども、背負っているものです。制度自体が、本来あるべき教育の姿と、実際国から押しつけられる教育とのギャップが激しいものですから、そのギャップは先生方の御苦労とりながら教職員が改めて憲法を勉強する、そして父母とも一緒にそのことを考えたい。そういう思いでつくったんです。ところで、法律家の方と教職員は似ているとおっしゃいますが、同感です。しかし現実は、教室で一人一人の子どもたちとつながりあいたいと思っても、今、国や教育行政が学校教育に求めているものとのズレが大きくなっています。一人一人を大事にするということよりも、学校が求めるものに子どもたちを向かわせるということに力を注いでいる傾向があります。本来、教育は人格の完成を目指すものですが、教師の思いがそこいく余裕がないような状態が「教育改革」という名の下につくられつつあります。そして、その中で学校教育が、競争や管理、さらに貧困と格差の問題、家庭の教育力や経済力によって子どもたちの未来が決まっていくような、そういう中で子どもたちが悩んでいる問題、そのことに学校はどうこたえられるか、あるいは教師が子どもたちのその悩みにどうこたえられるか、このようなことがすごく求められていると思うんです。このＤＶＤからは、子どもたち「一人ひとりが大切」、大事にしたいというメッセージが伝わってきます。その思いがとてもすばらしいですね。

憲法の根本価値は、「どの子も大切」ということ

（伊藤）うかがっていましてね、まさに「一人ひとりが大切」、憲法の世界でいう「個人の尊重」を想起しました。それがこの国の憲法の根本の価値なわけです。言葉を換えれば、「自己肯定」といいますか、この世の中に生まれてこなければよかった子どもは一人もいない、ということが憲法の根本の価値なんです。たとえ問題行動を起こしてしまうような子どもであったとしても、それでもやはり今ここに生きている、それだけでかけがえのない価値があるんだっていうのが憲法の根本の価値なものですから、それを何とかいろいろな形で伝えたいなというのが私の奥にある強い思いなんですね。先生方や、例えば親御さんたちが、子どもたちに「あなたは大切なんだ」って言ってあげることはすごく大切なことだと思うんですけれど、そこにもう一つ、この国で最も大切な法がそれを大切な価値としているんだよ、憲法というものはそれを一番大切なものとしているんだよということを伝えてあげることによって、保護者が言っていることや教師が言うことがさらに強調されるというか、それが本当にこの日本の社会では大切なことなんだなということを、より後押しすることができるんじゃないかと思うんですね。

（児玉）そうですね。

（伊藤）先ほどのお話にあったような、もうゴールが決まっていて、そこに到達できるかだけで評価してしまうというような教育方法は単純でわかりやすいかもしれませんが、まさに子どもたちの多様性や可能性をつぶします。将来どれだけ伸びるかわからない、どこへ行くかわからない子どもたちに、一つだけのゴールを決めて、そこへ引っ張るわけでしょう。そこから外れちゃったら評価しないわけというわけですが、それぞれのゴールはみんな違っていわけですよね。本当に、子どもの数だけその子どもの目指すゴールはあっていいわけであって、それを見つけてあげるのが、いわば、回りにいる大人の責任のはずですよね。それを一つのゴールだけ示して、これに到達できないやつはしょうがない、なんて言ってね、それはないと思うんです。ただ、この問題は、教育基本法改悪のあたりから、その前から続いていますけれども、背負っているものです。制度自体が、本来あるべき教育の姿と、実際国から押しつけられる教育とのギャップが激しいものですから、そのギャップは先生方の御苦労といろいろ努力ではいかんともしがいところはありますよね。

（児玉）東京は特にそうなんですよね。石原さんが知事になって、真っ先に「東京から教育を変える」と宣言しました。そういうことでスタートしたのが東京の「教育改革」でした。

憲法を学ぶことは「どう生きるか」ということ

（伊藤）ええ、そう。「憲法を観る」を廃棄する」と言いましたよ